

2017. 5. 24 (水)

本をよむこと，考えること

渡 邊 勉

朝日新聞の投書

今日、私に与えられたテーマは「大学って何だろう？」です。これは、多分打樋先生が、私が教務担当の副学部長だということを考えて私にテーマを与えていただいたと思いますので、今日は大学で学ぶということについてお話できればと思っています。

まず、「学ぶ」といったときに、最初に思い浮かぶのは「本を読む」ということではないかと思います。そこで「本を読む」ことから、お話していきたいと思います。

今年の3月8日の朝日新聞に、「読書はしないといけない」という投書が東京のある大学生からありました。読んだ方もいらっしゃるかと思いますが、投書の内容を少し説明したいと思います。投書の発端は、2月に全国大学生生活協同組合連合会が発表した「1日の読書時間が0分という大学生が5割に達した」という調査結果にあります。この結果を読んだ学生は、そもそも本を読まないということはよくないことなのかと疑問を呈します。そして読書よりも、アルバイトや大学の勉強のほうが大事なんじゃないか、読書は楽器やスポーツと同じように趣味の問題であって、読んでも読まなくてもいいのではないかと主張していました。この投書は、その後た

いへん大きな反響を呼び、さまざまな意見が朝日新聞紙上で何回も取り上げられました。

私は、この投書を非常に興味深く読みました。しかしそれとともに強い違和感を持ちました。その違和感は2つあります。一つは、この学生が、なぜ読書しなければならないのか、わかっていないということでした。そしてもう一つは、読書より大学の勉強のほうが大事だとはっきり言っているということでした。ちなみに、この大学生は、教育学部に在籍しており、教員免許を取るためには、大学の勉強が大事なのだということです。

この投書の背景を考えると、読書をしなくても、生きていく上では別に困らないんじゃないかという考え方が、この学生にあるのではないかと思います。そして、役に立たないならば、本を読む必要はないのではないかと考えているのだらうと思いました。つまり、役に立たない本を読む理由がよく分からない、思いつかないということです。

果たして、本を読むということは、この投書にあったように、役に立つとか役に立たないという視点から考えるべきものなのでしょうか。ここで、そもそも本を読むということは、どういうことなのかということを、少し考えてみたいと思います。

本を読む理由

本を読むことの一つ目の理由、利点は、この大学生自身が投書の中で述べているのですが、教養を身につける、あるいは新しい価値観に触れるといったことだと思うのです。多くの人にとって本を読むという行為は、今まで知らなかった知識を得るということだと思います。確かに知識を得るということとは非常に大事なことで、大学時代に、そういった経験をたくさんするという事は、非常に大事だと思うのです。ただ、読むというのは知識を得るということだけを指す訳ではないと思います。

ここで話が少しそれますが、私のゼミはデータ社会学の専攻分野にあります。私自身、データ分析を専門として、データ分析を教えています。そこで、本を読むということ、データを読むということと関連させてお話ししたいと思います。

データ分析において最も大事なことは、「データを読む」とか、「数字を読む」ということです。データ分析をおこなっていく上で、もちろん統計学の知識は大事だし、パソコンの使い方とか統計ソフトの使い方も大事です。私自身は大学の授業で、そうした知識や技術、技能を教えています。しかし、それはデータ分析において本当に大事なことなのかというと、実はそうではないのです。

データ分析をおこなっていく上で本当に大事なこと、本当に必要なことは、「数字を読む」ということです。「数字を読む」というのは、どういうことなのでしょうか。

社会学の場合であれば、データ分析といえ、社会調査のデータを分析する訳ですが、この場合、何千人もの対象者の調査票

に書かれた内容の特徴を明らかにしていくことが求められます。これは非常に複雑で厄介な作業です。何と云っても、分析する対象者の人数が多過ぎる。データをそのまま見ても、何千という人々の特徴を把握することは、至難の業です。人が理解できる許容範囲を超えているので、何か便利な方法はないだろうかということ、データ分析という方法がある訳です。

最も単純な例としては、例えば比率がある。皆さん、小学校のときにも勉強しているかと思います。比率によって対象者全体の特徴が分かる。男の人が何%、女の人が何%とか、そういう構成比率が分かる。だから、比率を求める方法が分かると、とても便利な訳です。

例えば社会学でいえば、デュルケムという社会学者は、フランスの地域別の自殺率を求めました。スタウファは、アメリカの軍隊の部隊ごとに昇進に満足している兵士の比率を求めました。これらの研究から、地域や、所属する部隊によって比率が違うということが分かるのです。

単純に比率が違う、30%と40%で、どちらが大きい、みたいなことであれば、特にデータ分析を学んでいなくても誰でも分かります。もちろん、こうした数字の違いをはっきりさせるということは非常に大事なことです。しかしデータ分析においては、それは、実は数字を読んだということにはなりません。

「数字を読む」ということは、「数字の背景を考える」ということです。なぜ、地域によって自殺率が違うのか、あるいは部隊によって満足率が違うのか。異なる数字を作り出す社会とか、人々の考え方や行動の仕組みがど

うなっているのかを考えること、これが「データを読む」ということなのだと思います。

ちなみに、先ほどのデュルケムは、自殺率の背後にアノミーを、スタウファは満足度の背後に相対的剥奪を見いだします。つまり数字の裏側にある社会的なメカニズムを読み取るのです。それは、数字の大きさを見ているだけではわかりません。

データ分析にとって大事なことというのは、統計分析の技術を学ぶことではなくて、数字に現れた世界がどうなっているのかを考えるということだと思っています。つまり、データ分析というのは、「数字の大きさを知る」ということではなくて、「数字の大きさの意味を考える」ということです。そしてそれは、数字の外側にあるものについて「考える」ということ、社会や世界を知る、分かるということとは、数字の外側にある世界について理解するということだと思っています。

これは本を読むということにも当てはまると思っています。投書した大学生は、本を読むということは知識を得ることだと考えていました。しかし、本を読むということは、知識を得るとか、情報を得るということだけではなく、それ以上に大事なことは「考える」ということだと思います。本を読むということは、本に書かれている内容の外側にある世界について考えるということなのです。そう考えると、本を読むということは、考えるためのきっかけに過ぎないのです。本の外側を考えることを通じて、世界や人のことを深く知ることができ、理解できるようになっていくのだと思います。

世の中は答えのないことばかりですし、分からないことばかりです。そして、本当に大

事なことは、多分、誰も教えてくれない。皆さん自身の問題というのは、皆さん自身で考えなければいけない。誰かが教えてくれる訳ではない。自分自身で考えることによるのみ分かること、分かるようになるのだと思います。だからこそ、考えることは大事だというふうに、私は考えています。

役に立つとはどういうことか

大学生の投書の中で、もう一つ気になっていたのは、本を読むかどうかの基準を、役に立つかどうかということだけで判断しているということです。そもそも役に立つというのはどういうことなのでしょう。役に立つというのは、何か目的があって、その目的を達成するために、その知識とか、技能が有用であるということです。

それでは、その「目的」とは何なのだろうか。いい会社に入ること、早く結婚すること、金持ちになること、人並な人生を送ること、いろいろあるかもしれません。でも、ちょっと考えてみてください。確固たる目的を持って生きている、そういう人もいるかもしれませんが、そうじゃないという人のほうが多いのではないのでしょうか。多くの人は何となく生きていたり、漫然とこうなったらいいなと考えていたりするのではないかと思います。人生の目的を明確に示せる人はそれほど多くないのではないかと思います。それに、私たちは、日々いろいろな人たちに会って、いろいろなことを知り、いろいろなことを考えて生きている。そうしたら、日々の生活の中で目的だって変わっていくに違いない。人間が成長し続けるのだとすると、目的だって変わっていったって当然だと思うのです。

だとすると、今役に立つと思っていることが10年後には役に立たないかもしれない。逆に、今役に立たないことでも10年後には役に立つかもしれないのです。

役に立つか、役に立たないかということとは、実は本人にもよく分からないのだと思います。だから、本を読んで知識を得ることであれ、あるいは考えることであれ、それが役に立つかどうかで判断するということは、本当はあまり意味がない。要するに10年後に役に立つかもしれないということは、僕らにとっては幾らでもあるということです。

今までの話をまとめると、次のようになります。

ひとつは、本を読むということは考えるということ。もうひとつは、役に立つか、立たないかということで本を読んでも意味がないということです。私自身、実は高校時代、理系を志望していて、物理学を大学で勉強したいと思っていました。しかしその後、いろいろと悩んで、文系に志望を変え、哲学や美学を勉強したいと思うようになりました。だから、大学に入った頃は、高校時代に必死に勉強していた数学や物理など、大学での勉強には役に立たないと思っていました。でも、今私は統計学を教え、数理社会学もずっと勉強してきました。だから今となっては高校時代の勉強は、役に立っているみたいです。

要するに、役に立つか、立たないかというのは、よく分からないところがあることが言いたいのです。

大学での学び

少し遠回りしましたがけれども、ここで「大学って何だろう？」という話に戻りたいと思

います。

今までお話してきた「本を読む」ということは、大学での学びの一部分であり、また大学での学び全体にも共通すると、私は思っています。つまり、大学の学びというのは、知識を得ることではなくて、考えることだということです。そして、役に立つか、立たないということだけで、勉強しても意味がないということです。

大学での4年間というのは、長いようで実は短いと思います。でも、自由に使える時間というのは意外と長いのです。大学では、当然ですけれども、知識を得ることができる。技術も学ぶことができる。友人や先輩、後輩、先生と話をしたり、議論したりすることもできる。ボランティアをしたり、留学したりすることもできる。もちろん本を読む時間もたくさんある。それは、私たちがさまざまな事柄について考えるためのきっかけです。

もちろん知識を得るということは非常に大事です。知識がなければ、当然、考えることもできません。例えばアフリカの貧困について考えたいといっても、アフリカの貧困について知らなければ、考えることさえできない。ですから、知識は絶対に必要です。ただ、知識を得るためだけに大学で勉強する訳ではないし、本を読む訳でもないし、留学する訳でもないのです。一番大事なことは、そこで何を考えるかだと私は思っています。大学というのは、そうしたきっかけをたくさん与えてくれる最良の場だと思っています。そのための場だと言っていていいでしょう。実際、皆さんは大学では、勉強するだけではなく、いろいろなことに挑戦しているのだと思いますが、そこに共通しているのは、そうした挑

戦を通じて考えていくことだと思っています。

だから、投書した大学生が、本を読むより大学の勉強のほうが大事だというのは、間違っていると、私は思っています。どちらも大事であり、本質的には同じことをしていると私は思うのです。

最後に、何のために勉強するのか、あるいは考えるのか、さらには何を考えればいいのかということなのですが、その問い自体が、私たちが考えなければいけないことなのだと思います。つまり、明確な答えなどないということです。大学の学びとか、大学で取り組むことには答えがないことが多いのです。しかしそうした答えのない問いに、どれだけ自分自身で考えて、突き進んでいくかということが、大学生活にとって大事なのだろうと思います。考えたからといって、答えが見つかる訳ではありません。考えたから、何かいいことが待っているという訳でもありません。でも、考えることを通じてしか、私たちは前に進めない。いろいろ教えてもらうことで、問いに対する答えがわかったとして、それで

自分の人生が前に進むということはなく、そうした教えも含め、自分自身できちんと考えてみることでしか、私たちは先に進めないのだと思います。ですから、私たちは考える。考えるための最良の場、それが大学という場なのです。そのために、皆さんは、大学での生活というものを、ぜひ有効に使ってもらいたいと思います。

皆さんを含め今の大学生は、授業にきちんと出席する学生が多いと思います。そして、きちんとした成績をちゃんと修める。しかしそれは、副学部長である私が言うのは不適切なのかもしれないですけど、大学での学びという観点から考えると、実はそれほど重要だとは思っていません。それよりは、今までお話ししてきたように、大学での授業を通じて、自分で深く考えていくということをしてもらいたいと思っています。

以上で、私のお話を終わらせていただきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

(社会学部教授)